

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 7 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370507

研究課題名(和文) 女書の音声表現形式に関する研究

研究課題名(英文) Study on the sound representation of Nushu

研究代表者

劉 穎 (Liu, Ying)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：10307118

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまでの女書歌メロディに関する基礎研究をもとに、新たに収集した作品の採譜分析および検証を行い、以下の点を明らかにした。

女書歌は韻文体ではあるが、漢詩とは異なり押韻や平仄にはこだわらない。平仄とは関係なく上下句を一定のリズムで吟唱する。近年現地方言の官話化が進んだことで、女書歌の創作やメロディは大きな影響を受けており、伝統的な女書歌の伝承は困難になりつつある。現代音楽の影響により、女書歌のリズムは吟唱から歌曲に変化する傾向が認められる。

研究成果の概要(英文)：Based on the basic studies of Nushu melodies that I conducted previously, in this study, I recorded new songs and took down the musical notations. Through on-site research and analysis of the musical notations, I came to the following conclusions:

1. Nushu is a special kind of verse that is different from the traditional Chinese Classical Verse (i.e. old-style poetry and metrical poems). It does not strictly follow the rules of rhymes or level and oblique tones. 2. It does not follow the level and oblique tones, rather it is chanted from one sentence to the next in a flow. 3. In the recent years the local dialect became more restricted by the standards of Mandarin. This had strong impact on the creation of new Nushu songs and its rhythms. As a result, the inheritance of this traditional and unique art form had become increasingly more difficult. 4. Nushu is also influenced by modern music, the tendency of changing its rhythm from chanting to singing is recognized.

研究分野：人文学

キーワード：女書歌 吟唱 女書伝承者

1. 研究開始当初の背景

女書とは、中国湖南省の江永県で発見された、現地の一部の女性しか読み書きできない特殊な文字及びその文字で記録された作品を指すのが一般的である。日本の女書研究第一人者と見なされる遠藤織枝氏も女書を「女文字」と名付けている。宮哲兵の「一個驚人的発見」が皮切りに、多く分野に渡り女書研究が行われた。文字学の視点からは、清華大学教授趙麗明著『中国女書集成』(1992)『中国女書合集』(2004)『女書用字比較』(2006)、中国女書文字第一発見者、元江永県文化館の職員周碩沂著『女書字典』1995、日本の元文教大学教授遠藤織枝著『中国女書研究』(2002)、元中央民族大学教授陳其光著『女漢字典』(2006)などがあり、民間文学または民俗学の視点からは、趙麗明著『女書と女書文化』(1995)、周碩沂著『永明女書』(1995)、元江永県政府宣伝部長劉忠華主編『閩中奇跡 中国女書』(2005)など、女性学と社会学の視点からは現中国武漢大学教授宮哲兵著『女性文字と女性社会』(1995)、遠藤織枝著『中国の女文字』(1996)など、歴史の視点からは、元中国中南民族大学教授謝志民著『江永“女書”之謎(上・中・下)』(1991)などがある。その他は、中国社会科学院民族研究所研究員史金波氏による少数民族文化との関連研究や、同研究院元語言研究所研究員黃雪貞氏による女書伝承者に対する方言調査及び女書流行地域の方言研究なども挙げられる。

しかし、女書はその文字とその文字が書いてある小冊子や物品のみでなく、その文字で綴った韻文の歌の音声表現も含まなければならない。女書文字は漢字のように、公用文や日常生活の手紙やメモなどにはまったく使わず、記録されたのはすべて韻文、すなわち詩集である。現地の女性たちは、古代の詩吟と同じように、節をつけて、ある種のメロディで歌って表現し、歌って創作し、また歌って伝承するのである。たとえ一人で女文字の作品を読むときも、けっして黙読したり、普通の読み方で朗読したりせず、必ず節をつけて歌って吟味するのである。現地の女性たちは「女書歌」と呼んでおり、すなわち、女書にはある種の音声表現形式が介入されている。しかし、この音声表現の形式に対する研究は注目していない。収集した資料も研究書に上げた事例もその文字しか記しておらず、羅婉儀著『一冊女書筆記』(2003)以外に音声資料は付している資料はほとんどない。

本研究の応募者は2000年からこの問題に気付き、女書歌の音声表現形式の介入を探ろうと試みた。先行研究がない分野なので、試行錯誤で研究を重ね、以下の成果があった。

(1)女書歌の曲調は歌によって違っており、メロディに使っている音階は4つある。「女書創作作品のメロディとリズムについて」(2001)。

(2)女書歌の上下句末の節回しを考察した結果、その節回しは、女書歌が依頼する言語、現地の方言「城関土話」の声調によって決まることを発見した。その研究成果を2004年に北京で開かれた「女書の歴史、現状と未来」国際シンポジウムで口頭発表をし、翌年に論文「中国女書曲調と城関土話声調」(2005年)にまとめ、『女書歴史と現状』論文集に発表した。

(3)女書歌曲調と全歌詞の声調との対応関係を考察し、各音階と歌詞の声調との対応関係を探り、女書歌の音声表現形式は吟唱である結論に至った。「女書旋法」と城関土話の声調との関係における考察(2007)。

(4)吟唱は歌詞の声調の高低に従ってルールに則って節回しをするとは言うものの、同じ歌でも歌い手によってはメロディが少しつつ違う箇所がある。インタビューおよび採譜データを分析すると、二つの原因を突き止めた。1つは、歌い手の出身地によっては使う土話の違いがあること。もう1つは歌い手の感性による個人アレンジである。「女書歌メロディの恣意性における考察 何艶新との比較を中心に」(2009年)。

(5)女書歌の吟唱は簡単にはマスターできない原因を突きとめた。「女書文化伝承における言語的条件 方言の官話化問題をめぐって」2010年12月、「女書吟唱の習得と女書の伝承」(口頭発表)2011年10月28日)。

2010年以降、中国では女書歌の曲調に触れる文章もごくわずか見られるようになったが、しかし現地の民謡と混同するものが多く、系統的に研究する人はいない状態と言っても過言ではなかった。一方、伝統的な女書歌の吟唱法を熟知する伝承者がほぼいなくなり、その子孫の高齢化も進んでいるので、女書歌の音声資料の収集とその音声表現に対する研究はとても切羽詰まっている背景にあった。

2. 研究の目的

本研究は、応募者が十数年来にわたって行った女書歌のメロディに関する基礎研究を踏まえて、それ以後新たに収録する予定の女書歌を分析、考察することにより、女書歌の文体と吟唱のルールを解明していくことを目的とし、具体的な研究項目は次のようなものである。

- (1) 女書歌の押韻を解明する。
- (2) 女書歌の“平仄”を明らかにする。
- (3) 女書歌の吟唱と古代の吟唱との相違点を探る。
- (4) 女書歌の吟唱と現地混住している瑶族の歌のメロディとの関連を考察する。
- (5) 女書歌に使う現地方言の現状と女書の継承問題を考える。

3. 研究の方法

(1) できる限り現地調査を行い、残りわずかである伝承者へのインタビュー、女書歌の

音声資料の収録、さらに新しい女書歌の収集をする。

(2), 収集したデータを、伝承者ごとに、文字資料と音声資料に分けて整理する。

(3), 収集した女書歌を採譜、分析する。

(4), 整理および採譜分析中に現れた疑問点を再度現地に行き確認する。

(5), 中国本土、台湾および海外の関係研究機関を訪問して、女書や中国古代の吟唱法に関する資料を収集し、女書歌の吟唱特徴と比較研究を行い、その相違点について研究関係者と意見交換をする。

(6), 収集した女書の文字資料と女書歌の音声資料を統括的に分析考察し、それまでの研究結果に対する検証結果と新たに導き出した結論をまとめ、研究成果として論文にまとめて発表する。

4. 研究成果

この研究は基本的には現地調査を行い、そこで収集したデータを整理、分析し、さらに考察を通して研究結論を出すことなので、以下は年度ごとに研究成果を報告する。

(1), H26 年度

現地調査 1 回目(7月30日~8月19日)は、北京・武漢経由で江永県現地調査を行った。北京では社会科学院資料館及び各図書館を巡り、女書研究関連資料を収集し、また江永県方言研究第1人者黄雪貞及び首都師範大学吟唱研究センター諸研究員と女書歌の声調と吟唱の節回しとの関連について意見交換をした。武漢では『中国女字字典』の著者の一人である謝燮を尋ね、保存されている貴重な早期女書伝承者に対するインタビューと女書歌の音声資料を聞かせてもらった。江永県では、何艶新と何静華から新しい女書歌を収集し、さらに女書園と夏季女書学習班に取材をし、女書文化伝承の新動向を調査した。2 回目(12月25日~H27年1月6日)は、江永県現地調査及び北京の関係学者と調査データについての意見交換を行った。江永県での調査対象は何艶新と若年伝承者胡美月・胡欣の女書歌を収録した。2 日の調査データを分析考察すると、恣意的なアレンジにおいて、楽音はその歌詞の声調に完全に対応していないものの、そのアレンジは声調の始点と終点、特に終点の調高を基にして行われる。楽音はその歌詞の声調の始点か終点を基にアレンジする場合は、往々にしてその前後の歌詞の声調に影響に基づいてのことであり、対応する歌詞の前の歌詞の声調に影響される場合は、それと同じ楽音が高低差が小さい楽音でアレンジする傾向がみられ、対応する歌詞の後ろの声調に影響される場合は、後ろの声調の始点に対応する音高と同じ楽音が、それに近い楽音で節回しをする傾向がみられた。また、吟唱にはほとんどない倒字の歌い方もみられたが、箇所が少なかったため結論を出すにはいたらなかった。さらに、音声デ

ータの採譜で、歌い手によって同じ歌詞になるといつも違う楽音で歌う現象がある。調査データの分析と考察を通して、以下の仮説と結論を出した。

女書歌の吟唱において恣意的なアレンジがなされる主な理由は、楽音が前後の歌詞の声調に影響を受けることにある。

同じ句の中において、同じ声調の歌詞が半分以上続き、いわゆる“平仄”のバランスが良くないとみられる場合、歌い手はメロディの抑揚を図るため、楽音と声調の呼応関係を無視してアレンジすることがある。

何艶新の「自伝」に、韻文の吟唱にはあまり使われない倒字の歌い方が数か所あった理由は、前後の歌詞の声調のバランスが良くなかったからではないかと考えられる。

女書歌の歌い手は、音階の高低差が大きいメロディよりも滑らかな節回しがきれいであると思っていることを推測できる。

若年伝承者の吟唱は年長伝承者よりも楽音の高低差が大きい傾向があり、リズムも軽快さがある3拍子で統一して歌うのがほとんどである。

女書歌に使う言語は城関土話であるが、歌い手の母語に影響され、城関土話の調値に対応しない楽音で歌うときがある。

以上のように、女書歌の吟唱における恣意的なアレンジについては、単なる歌い手の感情や韻文作成に関する知識の欠如によるものではなく、前後の歌詞に呼応する楽音の調和を大切にしているのではないかと考えられる。女書文化がさかんに流行っていた時期の女性、いわゆる伝統女書伝承者の吟唱は、激しく変化するメロディよりも、滑らかに節回し、抑揚をつけて自分の内心を訴えることを好むという仮説を立てた。一方、伝統女書伝承者と比較して、いまの若年伝承者の吟唱は歌詞の声調の高低に対応する楽音で歌ってはいるが、その高低差を大きくしてよりメロディの変化を求めて節回し、より軽快なリズムで歌う傾向がある。

(2), H27 年度

引き続き現地調査を行い、新たに女書歌の資料を収集するとともに、それまでに整理分析、さらに考察したものを確認及び立証していくことを重要視した。1 回目(H27年9月6日~9月15日)と2 回目(H27年12月25日~H28年1月6日)の実施先はいずれも北京と江永県であった。1 回目は、北京では主に図書館や研究機関などで女書研究関連資料の収集と首都師範大学吟唱研究センターの研究関係者との意見交換を行った。江永県では、県政府が主催した女書文字ワークショップに参加し、出席者との交流を図り、さらに県政府に要請に応じて、ISOに提出する「女書文字リスト」の修正と注音に協力した。そのほかは、準原生態女書伝承者何艶新と何静華に、女書歌のメロディのゆれのある箇所を確認したり、新しい女書歌を収集したり、し

た。2 回目は、北京では引き続き女書研究関係資料の収集をし、さらに現地調査で収集した女書歌の方言の発音や吟唱のメロディとリズムについて、江永方言専門家黄雪貞氏と伝統読書方式である吟唱に詳しい朱立侠氏と意見交換をした。江永県現地では引き続き年長伝承者に対する収集データの再確認と新たに収録することに、特に若年伝承者の代表者である胡美月に対しての調査と歌の収録をし、さらに胡の歌い方を年長伝承者と比較して、その相違点を探ってみた。学者との意見交流と調査データの分析と考察を通して以下の結論を出した。

現地女性による創作女書歌の文体は七言句の韻文体が 90%以上占めているが、漢詩や名言の引用以外はほとんど平仄の規則と押韻にこだわっていない。

年長伝承者の歌詞の発音はかなり生まれ故郷の方言に影響されている。

若年伝承者胡美月は、女書が流行していない 80 年代に伝統文化として女書歌の吟唱を学んだが、そのメロディの 7 割以上は歌詞に対応する楽音で歌っている。

胡美月の、対応楽音で歌っていない箇所のアレンジは、その要因の 9 割は筆者のこれまでの研究結果と一致している。

胡美月はとことどころ高低差が大きい楽音の組み合わせでアレンジする。また、アレンジする必要がないと思われるところに対応楽音のルールに従わないアレンジをするときがある。これについて胡に確認したところ、筆者が H26 年度に立てた「メロディに変化をつけてバラエティに歌う」ことを求める仮説と一致している。

胡の自作の歌には「レドレ」という抑揚を図るアレンジと「ラドレ」という声調の高低と反対の楽音で歌う、いわゆる“倒字”のアレンジが見られる。これは、伝統女書歌の中によくある歌詞のフレーズのメロディを決まった楽音の組み合わせで歌う印象がある。

伝統女書歌の七言句の歌詞を「2 字・2 字・3 字」に分けて、リズムを「3 拍・3 拍・4 拍」で歌う規則と、下句第 1 小節の 3 拍目は休止を取るという規則には従わないときがある。この歌い方からは、伝統女書歌の、中国古代の抑揚をつける読書法の吟唱から現代の歌曲の歌い方に変化していると考えられる。

H27 年に、筆者は年長伝承者何艶新、何静華と若年伝承者胡美月との比較研究したほかに、音声資料が残りわずか、2004 年に 95 歳で亡くなった、女書さかんな時代で育った最後と見做されている原生态女書伝承者陽煥宜(1909~2004)の歌(『一冊女書筆記』(羅婉儀、2003、P.253、付録 C D に収録)のメロディとリズムを、何艶新、何静華それに胡美月と比較しながら考察し、その共通点と相違点を以って、これまでの研究成果を再検証して“倒字”以外はほぼ一致したことを確認できた。この研究成果は、今後女書歌吟唱の

メロディとリズムの変容を探ることに也大いに役立つであろう。

(3) . H28 年度

最終年度でもあり、現地調査はこの課題の研究総括のために、調査データの分析と考察中の問題点の確認、及び理論研究として中国の関係学者との意見交換を重点に行った一方、これまでに収集した紙媒体の資料と音声データの整理と採譜に力を入れた。現地調査を 2 回行った。1 回目(2016 年 12 月 22 日~2017 年 1 月 10 日)の実施先は北京と江永県であった。北京では、国家図書館や関係研究機関で女書および女書研究の関連資料を収集し、さらに首都師範大学吟唱研究センターの諸研究者と元中国社会科学院語学研究所江永県方言研究第一人者黄雪貞研究員、それに中国メディア大学文芸理論と漢詩研究者蒲震元教授等と、中国古代の漢詩の吟唱法と学校教育を受けていない江永県の女性たちが創作した女書歌の吟唱との関連について意見交換をした。江永県では、主に女書伝承者何艶新に女書歌のメロディのゆれのある箇所を再確認した上に、新しい女書歌を収集した。この年で最もショッキングなことは、2014 年に国家級女書伝承者に認定された何静華は脳梗塞を患い、女書の文字が書けなくなっただけでなく、女書歌の歌詞を読んだり吟唱したりすることも難しくなった。実際は何静華よりも何艶新は子供のころに女書の先生だった祖母に直伝を受けて女書の文字と吟唱法をマスターしたのだが、何静華は九十年代の後半から始めて女書を学び始めたのだった。しかし、何静華はいま女書の講師を勤め、生徒数は最も多い。それが理由で国家級女書伝承者の称号が与えられたと言っても過言ではない。すなわち、女書歌吟唱のメロディとリズムの変容に影響が大きかったと考えられ、彼女の歌い方を研究するのは伝承女書歌の歌い方からいま現在の歌い方への変容、さらに今後の変容にも重要なのである。このたび彼女を見舞いに行ったとき、ゆっくりとインタビューに答えてもらったが、歌の収録はまったく無理だった。悪いとは思いつつも、確認したい箇所をゆっくり発音してもらい、20~30 分ぐらい貴重な時間をもらった。何静華は重度な糖尿病にも患っており、今後の調査はますます難しくなるのではないかと推測できる。そのため、今年度は主に何静華のメロディとリズムの分析研究を通して、その特徴を以下にまとめた。

これまでに考察した伝承者と同様、基本的に歌詞の声調に対応する楽音で歌っている。

何艶新と陽煥宜よりも比較的多くの抑揚をつけて歌う。

高低差の大きい楽音の組み合わせでアレンジする傾向にある。

中平声調の 33 調を低音「ラ」でアレンジするのが多くみられる。

歌詞の振り分けとリズムは、これまでに考

察した下記の2つの歌い方がみられる。(は歌詞、 は節回しまたは休止を表す)
A. 歌詞を「2・2・2・1」に振り分け、3拍子で統一して歌う場合

図1.

B. 歌詞を「2・2・3」に振り分け、「3・3・4」拍で歌う場合

図2.

何静華のメロディは、声調に対応楽音で歌うことを基本にしているが、大小の抑揚を細やかにつけるなど、音の変化に富み、リズムも以上のAとBの2通りの取り方を見せた。表現の豊かさが何静華の女書歌における特徴の1つであるといえよう。また、若年傳承者の歌い方にも同じ現象があることから、教師としての何静華の影響があったと考えられるのであろう。

2回目(2017年3月8日~3月13日(6日間))の調査の実施先は上海と南京であった。上海では、清朝末期国学者及び漢詩吟誦研究代表者唐文治の弟子だった前上海師範大学教授蕭善薌及び上海交通大学中国古代文学専門、漢詩吟唱研究者陳以鴻氏等を訪問して、古代の漢詩吟誦曲調と女書歌吟唱曲調との相違について意見交換し、さらに関係資料を収集した。さらに、何艶新が創作した女書歌2首を蕭善薌に唐調のルールでうたってもらった。また採譜分析はしていないが、今後、漢詩の吟唱と女書歌の吟唱との比較研究にとっても貴重なデータを手に入れた。南京では、現代中国における漢詩詩吟研究代表者陳少松氏を訪問して、主に漢詩吟唱の歴史、流派及び理論研究について交流し、さらに女書歌の吟唱との関連について意見交換した。2回目の調査では、以下の2点を確認できた。

女書とは、その特殊な文字とその文字が記してある物品と小冊子だけではなく、その音声表現形式である吟唱も含まなければならない。

女書の「口頭性」こそが、初回中国国家級無形文化遺産リストに登録された最も重要な要素であり、女書研究においてはけっして無視できない課題の1つである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

・劉穎、「女書習俗」的内涵及其“口頭性”考、日本常民文化紀要、査読有、第三十二輯、2017.3月、P116~76

・劉穎、中国国家級女書傳承者何静華とその吟唱の特徴、成城文藝、査読有、第237・238合併号、2016、P61~28

・劉穎、陽煥宜の女書歌のメロディとリス

ム、成城文藝、査読有、第233・234合併号、2015、P54~28

・劉穎、胡美月の女書歌の楽音と声調との対応関係、成城文藝、査読有、第230号、2015、P49~23

・劉穎、女書歌の歌詞の声調に対応しない楽音について、成城文藝、査読有、第226号、2014、P104~82

〔学会発表〕(計2件)

・劉穎、试论女书歌的吟唱规律对女书作品的检验功能——以传统女书歌的本字翻译及新创女书歌为考察对象、中日文学と文化交流対話国際シンポジウム、雲南大学文学院と日中人文社会科学学会共催、査読有、2016年9月10日、(中国)雲南大学

・劉穎、女書文化の変容とその要因、日中人文社会科学学会第14回研究発表大会、査読有、2015年6月19日、東京学芸大学小金井キャンパス20周年記念飯島同窓会館

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

劉穎 (LIU Ying)
成城大学文芸学部教授

研究者番号：10307118